

特集：昭和20年代の中・高部

昭和19年の終りから 終戦まで

清水千代（元教頭・数学科）

昭和19年も末になると学校は勉強をする所ではなくなっていた。学校工場をはじめ軍関係の仕事に勤労働員されてただ従うだけであった。平時には経験できない種々の事であったが遠い思い出のように懐かしくも思い出される第一は宿直のことである。御真影奉載後は男子の教職員が輪番で宿直に当られたが、空襲が激しくなってから女子も宿直に加わることになり男子1名女子3名位のグループで週に二度程廻ってくる。後に院長となられる光明先生や故人となられた上田先生と近くの浅野さんのお宅までお風呂を頂きに伺った事もある。本務より気がかりなのは食事の問題である。私はよく中木先生と一緒にキャベツの刻み方だしの取り方から教えられてお手伝をした。長野先生が学校農場から運んでこられた材料を料理室にお持ちになるついでに私の方をチラッと見て“前ちゃん、その手付きでは当分お嫁に行かない”等とおっしゃる。大きな一升びんをかかえていると不安そうに見ていらっしやった。でも中木先生とグループになった時は安心なのだが、新米ばかりが一緒になると大変だ。ほろふき大根を作ってほめられる事もあるがライスカレー等になる事が多く、そんな次の日出張なさる先生にお辨当を作らねばならず、嚴重に包んでカレーを持って行って頂いて案の定大失敗。困った揚句とはいへひどい事をしてしまった。大晦日の夜は思いがけず長野先生が昼間一旦帰宅なさって大きなお重



昭和22年

前列右から二人目清水、三人目中野先生

を持って戻られた。年越の御馳走もお雑煮もすっかり諦めていたので、大変な感激であった。食後は、楽しい団欒の一時であるが夜鍋仕事もあった。空襲で印刷所が焼け卒業証書の印刷が不能になったため、いよいよ長野先生のガリ切りが始まるのである。一枚一枚丁寧に刷り名前を書き校印を押し控えとの割印等宿直員全員でお手伝いした。立派な出来栄である。戦後何度か作り直す話があったが、卒業生はワラ判紙のガリ版刷りの方が貴重だから大事にしたいと云ってそのままになっている。もう卒業45周年を迎えている。もう一つの夜鍋仕事は吉本先生の進学事務である。推薦書の代筆というわけには行かないが現在は学級担任の分野と思うが当時は学監と云う肩書を持っておられた吉本先生の御仕事だったのである。9年前卒業した私も進学するに当ってこんなに御苦労をおかけしたのかと初めて理解した。数年後卒業級を

担任してつくづくわかるのであった。進学希望者は少なくともすべて手仕事の時代だったのである。

第二の思い出は報奨金のことである。学校工場に動員された生徒へ国からの日当とでも云えばわかりやすいであろうか。欠席をする生徒もいるので一人一人の計算をしなければならない。その当時の書類はその後一度もお目にかかっているのではない。ではっきり覚えていないが一月皆勤者で20数円だった様に思う。何十何円何十何銭という細かい金額を計算して袋に入れ間違いがない事を確かめるまで、本職ではないので結構大変な仕事であった。授業の代りに会計事務をしていたのである。然し他にすることはないので(先生は作業に加わってはいけいなのである。)早く授業がしたいとは思ったがそれ程苦でもなかった。

3月10日の東京大空襲をさかいに私達の生活は一変した。当直任務も警報が出ると真剣である。警報が解除になれば被害を受けた生徒の家を訪ね

て廻る。無事な顔に合うとホッとする。大多数が疎開をされていて生徒の数は少なかったが当然の成行というべきか。3月には本所方面で小学部の中沢先生が、5月には青山方面で女学部で鶴来先生が悲しくも犠牲者となられたのである。お二人ともお若くてお元氣な明るい先生方であった。

5月25日の夜には学校も空襲をうけた。当時軍が校舎に入っていたのでこの夜は大活躍してくれた由、おかげで焼失を免がれた。私も我が家に戻っていて見事に焼け出されてしまった。実は2日前の同じ頃警報がなったばかりで起きたくなかったのだ。油断もあつたらうがまた大失敗をしてしまった。この後戦後までの二カ月程は無我夢中何が何やら全く自分を見失っていた。終戦が一と月おくれても日本の戦後の立ち直りはずっと遅れたに違いないと思うのである。8月15日を機にこれからは教育の道に生きようと思った。とに角燈火管制のとれた夜の嬉しさは忘れられない。

主の手に導かれて

中野 登美子(元英語科)

第二次大戦後の混乱の中で、一つ一つ建て直して行った身近な事を幾つか思い出して見ると、民主主義教育、英語教育、音楽教育、修学旅行、修養会、キャンプ、生徒会活動、校地・校舎の拡張、院制、新制中学、高等部、専攻科から短大の新設、学校事務関係等、昭和20年代に着手されたことだけを採っても、実に膨大である。しかも、院長と新任の教頭を含めて片手に充たない程の男性の職員と、女性は数人のヴェテランの先生の他は殆んど20代の若年層という陣容であった。

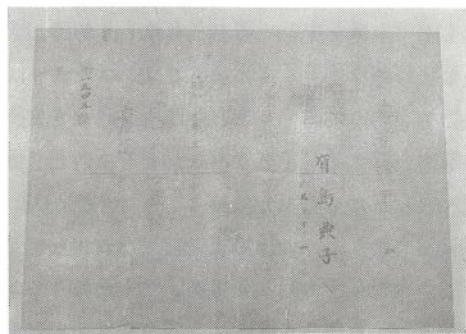
「民主主義」という新課目が「修身」、「作法」と交替し、英語科は日本人だけで約2年間担当し、音楽科は専任の先生が不在で、授業以外の諸事は、

不馴れな私が、年中の企画、まとめ役兼、自主活動の指導を仰せつけられた。クリスマス、イースター礼拝に於ける「メサイヤ」の合唱や、高三卒業生によるコーラス「信仰・希望・愛」も一曲ずつ復活して捧げた。かくして昭和26年度には臨時体制も解かれ、宣教師の先生方、各教科の専任教師等、教師数も生徒数も格段に増え、都内でも数少い整備された女子校として注目され始めた。

修学旅行について少し詳しく述べると、戦中から戦後、修学旅行など以てのほかで、苦しい少女時代を闊かかって来た生徒たちに、何か楽しい経験をとの願いから、困難な交通事情ではあったが、リュックザックに配給米、砂糖などを入れて、信

州赤倉温泉、長野市の県町教会、同幼稚園（当時、戦前に永く勤められた堀内肥佐子先生や、戦後、永く幼稚園や短大で教えられた荒牧富士子先生が迎えて下さった）を訪ねて、一、二泊の旅をした。昭和23年の秋であった。おみやげは、小麦粉とりんご。

25年に、北海道旅行に行きたいと言い出した学年担任が居たが、津軽海峡に魚雷が出没した事件が発生し、関西旅行に振り替えられ、生徒は大いに落胆した。その後関西旅行が続き、30年6月に初めて北海道旅行が実現した。北海道の地勢、気候等がカナダに似ているということで、原生林や美しい湖水の多いこと、酪農の状況、景色の雄大さ、どれをとっても敗戦の傷あとの濃い東京では味わえない大自然の力を、しかも僅か5時間ほどであるが船の旅も現実を経験出来る此の旅は修学旅行にふさわしいものと、慎重な計画と準備を以て期待した。学校の屋上に列車の図を描いて、88人乗りや80人乗りの車輛に、短時間で秩序正しく乗降する練習をしたり、リュックに荷物を詰める仕方、救急のお話（特に海上にての注意も）、おやつは現地で新鮮なキウリ、ニンジン等野菜を購入し、塩をつけて食べる等、当今では想像も出来ない様な緊張と実益の旅であった。中学部では、3年の秋に関西旅行、飛騨高山、黒部ダム等中部地方への旅を行なったが、これは昭和50年



昭和20年のガリ版の卒業証書

頃から、有志参加の理科、社会科、国語科の学習旅行に変っている。

夏のキャンプについてはどこかで書いたような気もするが、野尻キャンプは戦前の昭和10年にはもう始まっていて、YMCAの野尻学荘をお借りしたり、13年には野尻湖畔宮沢の地に英和の家が建設された。（YWの近く）建物は一棟式で、中央に集会室兼食堂があり、その両翼に畳の寝室があった。戦時中に売却され、スペイン系カトリック施設の手に渡った。

戦後、昭和24年夏、当時担任をしていた中三の生徒たちに、是非、キャンプに連れて行って欲しいとせがまれ、同学年の保護者のお一人から、信州茅野にある昔からの家を提供しましょうとお申し出があつて、長野先生からお許しがあつて、3人のクラス担任が交替で、8人位ずつ2泊3日を一と夏に3回行なったことがある。今思い出すとヒヤッとするような事件もあつたが、とにかく楽しく済んだ事は本当に嬉しかった。野尻キャンプが始まったのは、翌25年からである。

修養会の歴史も古い。戦後すぐから、学校全体修養会というのが一日をかけて行われたのが始まりで、それが2日、3日と連日になり、やがてYMCA修養会、宗教部修養会と盛んに行なわれた。一時は中等部、高等部が分れて、それぞれ3泊から4泊と、各部共30人、40人という参加者があつた。受洗者も、高三になると30人を超えるという時期があつた。兎が、此の宿泊施設を探るのが一と苦勞であつた。何しろ往復の交通を考えると、遠出は出来ない。せいぜい2時間で行ける所、（鈍行＝各駅停車で）。箱根のニコニコ荘、哲学堂、藤山愛一郎氏山荘、御殿場東山荘、戦時中小学部が集団疎開をしていた生流山満願寺等、荒れたままで雨もりするものもあつた。その後、捜真女学校、女子聖学院、女子学院等の夏の施設を拝借した頃はかなり良くなつていた。しかし、

その頃から、各学校も夏の行事が多くなり、そこへ割り込ませて頂くのは難かしい。折りしも伊豆湯ヶ島に新しい山荘が出来るとの情報を得て、まだ建築が始まったばかりの天城山荘を見に行った。バプテスト系の修養会用施設であると管理の方の説明を伺い、大嵐の襲来で一と晩泊めて頂き、その中村氏御夫妻の信仰と、人格、識見に私たちは天の助けと喜び、爾来毎回お世話になっている次第である。又数年して、念願の「追分寮」も与えられた。

学校行政というと大げさであるが、一つだけ、校地拡張にまつわる隠れた話をお伝えしたい。戦災で焼野原となった東京の住宅事情の厳しさは、昨今とは桁がちである。教職員は何よりも住居の問題で苦勞していた人が多い。学校内の幾つかの部屋を（大講堂の舞台裏とか、準備室の奥とか使用されていない小さな部屋とか、運動場の一角の車庫等々）暫らく拝借したり、熱海や真鶴、鎌倉から大変な思いをして通勤する先生、見知らぬ

方の厚意により、その一室に同居する先生、食糧事情の悪い中で共同炊時など、大変なことであった。罹災を免がれた長野院長も、御自宅を何人かの先生のために居所を提供していらした。校地拡張、新校舎建築に着手するに当り、是非教員宿舎をと腐心して居られた。私たちも本当に有難い事と、様々に夢を描いて、何か月もかかってついに青写真を作成する処まで到達した。一方、院長先生は教員会議の席上、校舎の設計図と予算を示される度に、「先生方、もう少し待って下さい。此の部分が決定したら、その次は先生方の宿舎です」と何度も何度も繰り返された。「希望は延ばされるほど良い」という諺があるそうだが、私たちは忍耐強くその楽しみを味わった。今でも、英和の土地に立って見渡し、どの辺りに宿舎を建てる事が出来るだろうかと、もう全員が定年退職をした20代だった私たちは、その当時の胸の鼓動を現在の的に体感しているのである。

勤めはじめた頃のこと

八十島 栄（元数学科専任・講師）

私のはじめて東洋英和に勤めはじめた、昭和23年の秋は、終戦からおよそ3年経って居り、あの廃墟からようやく日本人が立直り、いくらかすべてが良くなりかけていた頃でした。

しかし、はじめて都電を降りた六本木の交差点には角に誠志堂がバラックながら営業していた以外、殆んど店らしい店などなく、ペンペン草が生え茂っている様な殺風景で、とても今では考えられない光景でした。

しかし、原宿で家を空襲で焼かれ、22年に小さな堀立小屋に近い家を建てて住んでいました私にとっては、その六本木の風景も、とくに珍しい風

景ではありませんでした。

威風堂々たる英和の校舎も、教室の窓のこわれた所に新しく入れ替えるガラスがなく、画用紙の様なもので、風を凌いで居りましたし、勿論、寒い冬も暖房はなく、スチームのラジエーターは、金物を国家に供出する為取りはずされたまま廊下の隅に無残に積んで有りましたのが、何とも恨めしく思われたものでした。

職員室にはただ一つ、煉炭火鉢が有りましてお年を召された数学の岡本先生がいつもあたっておいででした。私は20才という若さにもかかわらず大変寒がりです、教室から帰りますと、寒い寒いと

一番に火鉢にかじりつきますので、若いのにと笑われたものでした。

生徒たちはオーバーを着て授業を受けていました。職員室も今の中学部の職員室の半分の広さでしたし、当時も理科準備室は有りましたが、今の様に社会科室、数学科室等々ありませんでした。ですから小さい職員室に当時50人位の先生方が殆んどいらして、和気あいあい話し合ったり、相談し合ったり、いつも賑かで暖い雰囲気でした。

お昼には小さい教員食堂に肩を寄せ合うように持参のお弁当を食べながら、吉本先生から英和の昔のお話をうかがったり、鶴沼先生の戦時中の勤労働員の御苦労話をうかがったり、本当に楽しい一時でした。

学校の隣り(その後短大になりました場所)は、進駐軍が用いて居り、トラックが出たり入ったりして居り、アメリカ兵の大きな声が、しょっ中聞えて居りました。

又今の小学部の道路をへだてた区役所は、日雇いの人達が、朝集まって仕事を振り分けられる場所になっており、その人達の集まっている間を縫って生徒達が登校したものです。

当時はまだ駅の地下道や、橋の下など雨を凌げる場所に住んでいる人達も沢山居た時代でした。

教科書もノートも十分になく、特にはじめの年は、大きな紙に印刷してあるのを自分で切って折り揃えて、とじて教科書にするという粗末なもので、科目によっては全員に渡らないこともありました。テストをするのにも答案用紙を学校で揃えることが出来ず、「紙を用意して来なさい」と言っておいて各自ノートを破いたり、わら半紙を用意したり、試験問題もすべて黒板に書きますので、応用問題など黒板一杯文字を書く時は、私は手がだるくなって閉口いたしました。

授業が終って仲良しの先生とよく屋上に登りましたが、学校の屋上から港に浮かぶ船が間近に見え



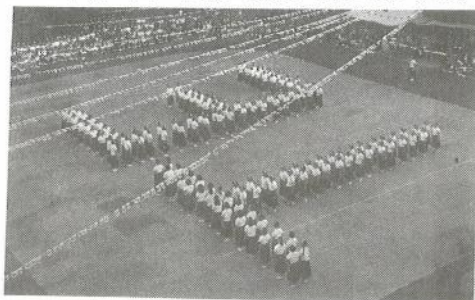
昭和24年
花の日礼拝後の慰問に陸軍第二病院へ

ましたことが、今思い出しても、もしかして夢だったのかしらとってしまいます。

H型の古い校舎の一方はすべて小学部が用いて居りましたので、可愛い小さい人達の声が聞え、運動会は幼稚園から専攻科まで一緒にいたして居りましたから、学校全体が一つになって、ワクワクする程楽しいものでした。何のかのと小学部の先生方と協力することも多く面白い時代だったと思います。

どれもこれもあの時代無事に生徒が学校生活を送れるようにと、長野先生はじめ、御年配の先生方が御努力なさって居られたことかと思いますが、当時若かった私にはその御苦労など察しませんでした。

そのうち、いつの間にか学校にスチームが入り、窓には新しいガラスが入り、職員室は二倍の広さになり、先生方の人数も増え、海が遠くなり、昭和30年代に入った様に記憶いたしております。



昭和28年幼稚園から一緒にの運動会(校庭で)

戦後復興期に学ぶ

景山 曉美（元国語科・図書室）

時は1948年（昭和23年）9月6日二期の始業の日であったか。台風襲来で大暴風雨の中、交通機関の乱れもあって面接約束時刻を数分遅れたか、重厚な正面玄関のドアを両手で開け来訪を告げたところ、「院長は時間を厳守される方ですから先程からお待ちかねでしたよ。」との言葉に恐る恐る緊張の面持で院長室（現事務応接室）で初めてお会いした。ふっくらとされた全身に温顔が満ちあふれ少しシャイな先生が「台風の中大変でしたね。」と静かにゆっくりおっしゃる言葉に緊張がほぐれた。（因みに、長野先生は早口の先生との定評であるが、ゆっくり話される事も少なからずおありだった。）この時以来約束20分前到着が私の信条の一つとなった。次にお会いした教務主任の井上健之助先生からは「貴女は国語の教員免状を持っているから中三の授業を持ってくれないませんか」とお頼みでしたが、不遜にも私は「司書として図書の整理をとの事でしたので考えて居りませんので」と言ってしまった。こんな事を言う方は恐らく私一人だったのではないか。

当時日本の社会全般が大混乱の最中なれど復興の槌音高く、軍隊が引き揚げた後の学校の整備は言うに及ばず（戦時中校舎の一部を軍隊が専有していた）疎開先から生徒が毎日復校し、教員数が不足していたのは確かで、半年後の4月から私も授業を持つ事になった。疎開地から帰った生徒や東京大空襲に遇った生徒の大半は制服は勿論学用品や教科書もなく靴がなくて下駄履きで登校する者が日に日に増加する。時折生徒昇降口（現、中学部生徒通用口、ローソクのある所）辺りでカラコロンと下駄の音がすると職員室から先生方がさっと飛んで行かれる。これは注意しに行くので

なく又誰かが新たに帰って来たのではないか迎えてあげましょうという心ばせである。そんな中、長野院長はどこからか運動靴を調達して来られるのである。わら半紙を綴じたノートにガリ板刷りの教科書でテストは黒板に問題を板書。“窮すれば通ず”の如く人間の知恵のすばらしさを誰もが自画自賛しては頑張っていた。愛すればこそ不可能なものも可能にするのである。当時このような中で学習された生徒が現教員として何人かいらっしゃる事を考えればそんな昔の事ではないのである。

私の任務は散逸した図書の整備でうなぎの寝床のような書庫（大講堂・講壇の真上、二階書道室入口の右手にドアがある）に押し込まれていた図書の運び出し、十進分類表に従って分類し、カード作成、原簿に登録記載して書架に納め、閲覧に供することと読書相談、指導、図書の選択購入等々。赴任して間もなくの夏休みを利用して本館二階の図書室（読書室であった処か）から別館三階へ大移動となり当時の図書部員全員が運搬の奉仕をしてくれた。今日のように台車等なく一列に並んで一冊ずつ手送りの作業。多少の差はあれ戦時中バケツリレーの経験を持つ生徒達で和気あいあいと誰一人嫌味等言わず、よい思い出もなった。当時の生徒はほんとうに“気はやさしくて力持ち”この表現がぴったりであった。図書室の向い側は当時五年生のH・Rだった関係上最上級生の利用が多く年令も近かったりで結構良い話相手でもあった。その方達も卒業40年50年を迎えられるわけである。

こんな学校生活が繰り返えされる或る日ララ物資（日本の戦災者救援の為アメリカから贈られた

救援物資)が学校に到着、一刻も早く生徒に配ってあげたいと金曜日の放課後仕分け分配することになった。仕分け場所は中学部校舎二階西側の畳敷の和裁室。当時戦災に遇われた何人かの先生が校舎に宿泊して居られた。地階の理科準備室に、二階の宿直室、お作法室に、講堂の楽屋裏等々に。夕方になるとカットベットが廊下に出はじめ理科準備室は調理室となる。これらは長野院長の温かいご配慮で教育現場に支障を来たす事のないよう最善の努力がはらわれた事である。この日も準備室は調理場となり十番通りで買って来た肉や野菜で賑わった。ジジィとフライパンで焼くステーキの香は廊下を伝って上へ上へと漂う。満腹した私共七・八名程はいよいよ物資の区分に入る。物資は食料品と学用品に大別し、二・三名ずつチームを作り作業開始。戦時中は衣服の色合いの規制があって黒の他、紺・茶・グレーはすべて濃いものしか着用出来なかった私達には夢の別世界、`目を見はるばかりの淡い色合いのランジェリーの数々、豪華なレース付き、フリル付きのブラウス、スカート、ワンピース、必需品のタオル、シーツ、ケット、靴、バック類、カラフルな鉛筆、万年筆、等々。靴はサイズの大きいものばかりで必要に供し得なかった。食料品は肉、ビーンズ、ハム、コンビーフ、チーズ、バター、クッキー、粉末ミルク等すべて缶詰、その他保存食、パウダー化粧品等ありとあらゆる品々の山で、まさに小マーケットが移動して来た感じである。戦災に遇った生徒等のリストは既に作られ、公平に公平に分けるよう院長よりのご指示に従って作業を進めている中に、ふと脳裏に、院長の生徒への温かい細やかな心遣いの深さを覚え教師たる者の生徒への姿勢、心得のようなものを言葉でなく無言の中に教えられた思いであった。これは私の教員生活の根本的な姿勢として持ち続けたものであった。これが神を敬う心での奉仕なのだと思ふに納得出来た。とに

かく今夜中に仕上げねばならなかったので皆熱中し気がついた時は10時を過ぎていた。当時学校の周辺は日没と共に闇に包まれ鳥居坂通りは外灯もなく旧岩崎邸の焼け落ちた土蔵(現国際文化会館)や焼け焦げた樹木が無気味さを呈し、女性ならずとも男性の一人歩きさえ考えられない状況であった。しかし痴漢が出たという話はいそ聞かなかった。痴漢の出没はこの十数年後かと思う。つまり各自の生活復興に夢中であったのだ。ハングリーである事は、かえって人間を鼓舞し、正道へ邁進させるものであるようだ。因って私は、宿直室で生活をしていらした菱谷先生のお部屋に一泊させていただいた。後にも先にもたった一度の体験であるが、先生の温かいお心に、じんとしたものを感じた。翌朝いただいたお味噌汁のおいしかった事。この夜の作業は英和での先生方との共同作業として最初のものではあったが、奉仕の意味が生きた現実のものとして充分理解できた。この夜学び得たものは愛情と奉仕と捨身の心であり、姿であった。生きた道標を示していただいた。申すまでもなくこの先生方の大半は既に天国に在籍して居られ。



昭和27年 日光修学旅行
ミス・マッシュソン、ミス・ダグラスと

一方娯楽としてなく楽しみのない生徒の為に昭和25、6年頃から一泊旅行が計画実施された。これが後の修学旅行へと発展した。お米や缶詰等食料入りのリュックを背負っての赤倉温泉旅行は重

い荷物もいとわず生徒教師共々喜々として出かけられた姿は印象的である。現在の北海道修学旅行に定着する迄には紆余曲折幾星霜、真剣に討議する中にも、今となればジョークととられそうな話も多々あった。決して船に乗せてはいけない。どうしてもという時は海でも湖でも真中に出ないで岸を伝うように行くなどなど。すべて安全第一安全の二文字に的をしぼった意見の一つであって笑えぬ状況であった。女子は男子と違って家庭に入ってしまうと旅行も、し難くしかも海を越えての旅行などとても出来るものでないからと北海道旅行を立案し計画に入った。ところが運悪く、津軽海峡に機雷が浮上の騒ぎに計画を断念、急拠関西旅行へ切換えた事もあり該当学年は可愛想であった。が、私達は胸をなでおろしたことである。以後関西旅行を三、四年継続した。一方急に遠出するのも大変なのでオリエンテーションの意味で一泊の日光旅行を中三でする事になった。初年度は中三と高一が一日ずれて出発し同じ行程で後を追う。中三先発。峻厳な九十九折りのいろは坂を、バスとケーブルを乗り継ぎ中禅寺湖畔からは初夏の戦場ヶ原を半日かけて三々五々湯本迄歩き夕刻湯本の南間ホテル到着。翌日は一気にバスで中禅寺湖畔から日光市内へ帰る行程である。宿に着くや、テンヤワンヤの大騒動は今も昔も変らぬ光景であり、担任二人（当時は二クラス）は部屋部屋を廻り着かせる迄に小一時間はかかるであろう。引率者一同（此の時は五名か）部屋に落ち着くと何が始まるか。各人が分担して持参した旅行費（当時は現金持参）を懐から、バックから、鞆からザラザラと畳の上に並べ、本日分の会計上の整理と残高照合、翌日分の小出しの用意等をし始めた頃、又々担任は呼出され、部屋に残されたのはマシューソン先生と私の二人。部屋一ぱいに広げた書類、現金の山に風呂敷を掛け、二人は顔を見合わせてはどうしまししょうの連発である。当時は旅行社に

依頼せず、勿論添乗員も頼まず、先生方で手作りの旅行で、全費用を引率者が分担持参した。又引率の中に宣教師の先生を加えるよう心していた。これは長野院長の教育的見解による配慮である。カナダよりこの地に派遣された先生がその国の代表的な観光地へも行かれ見聞を広められ且、生徒との親交を深めていただき日本で楽しい思い出の一頁にさせていただこうとのご配慮でもあった。長野院長は常にこの事を該当学年にお願いして居られ担任も理解し、生徒にもよく指導したことである。結局中断した会計は、消灯後電灯の光の下で声をひそめつつ“一枚だ二枚だ”と笑いこけながら仕分けをし翌日の持ち分が決まった時は12時を軽く回っていた。このような修学旅行を通し教師の生徒への配慮、教師間の責任分担、チームワーク、意志の疎通の大切さ、忍耐と勇気の積極性、相互の精神の貴さすべてを学んだことである。しかもこれらは一切生徒に恩をきせることなく、なにげなくスマートにふるまうこつのようなものを教えられた思いである。大変さの中にも教師として最初の修学旅行は楽しい思いの濃密なものであり今日に至っても語り草となっている。ホームルームでの出来ごとは枚挙にいとまなきことであるが、昭和8年（1933年）に建てられた現中学の校舎にまつわる七不思議については当時の生徒から教えられ一つ一つ探険したことであるが、今それにはふれることはさておき、生徒との触れ合いの場としての渡り廊下（本館から別館への通路、当時はサンルームと称す）での授業である。暖房のない冬の授業は、ここが最高であった。図書室の小さい丸椅子を一つずつ運び、やっとお尻の乗る不安定なことであっても生徒は実に喜こんだ。温室の中でポカポカと暖かく心持よくても居眠りは誰一人しなかった。天井は硝子張りで青空もそのままのぞめる。この天井は後の何台風かの影響で吹飛んでしまい生徒の夢も消えてし

まったのは残念であった。青空教室の思い出は後1カ所。当時のグラウンドの塀際に教段あるコンクリートの階段である。この石の階段に腰かけた太陽たっぷり浴びての授業もよき体験であったか。国家的にも社会生活にも教育の分野にも戦後の復興は目覚ましいものがあり、東洋英和でも生徒・父兄の要望に応えるべく短大創設の気運が高まり文部省より提示された設置基準を充たすべく準備が始められたのが昭和27年(1952年)であろうか。今は原型を止めることのない青楓寮(当時保育科の教室及び学生寮で、今日はビルが建っている。)の三階にリズム室と隣り合わせて図書室があった。中高の蔵書数と保育科の蔵書数を合計してもその基準を充たすことは難しく新規購入が始まり、キリスト教関係書、保育科関係書、新設予定の英文科関係書の増冊に拍車がかかけられ、宣教師の先生、保育科及び英語科の先生が専従された。中高では戦中書庫の奥深く入れられ日の目を見なかった宗教書の整理が始まる。

キリスト教と無関係に育った私には苦難であったが本多庸一先生・平岩宣保先生・清水由松先生・比屋根安定先生…等々の……伝、……略解……史を通し、キリスト教に接近出来、教会に導かれたのである。私の新しい人生の第一歩が始まったとも云えるのであった。キリスト教の理解なくして図書の分類も至難のわざである。フレーベル館発行の保育関係のものには幼児教育・リズム教育・心理教育など、楽しく読み取ったものも少なからずあった。外国書の少なかった当時、外国の本は何と夢多いものかと認識もした。図書の分類作業は授業の合間を見て青楓寮へ出かけるので毎日、三、四時間が精いっぱいである。寮の玄関でベルを押す。「先生でいらっしゃいますか。ご苦労様ですね」と迎えて下さる山崎まつのお声とお言葉は四十年経った今日も変ることなく私の耳に聞えるのはうれしいことである。(現在四国香

川県に在住)時に放課後には寮生に案内されることもあるが、端正な応待に、当時の私はずっと上級生のような大先輩のような風格に怖れを感じた程であった。寮の教育というか、宣教師の先生方の躰というか徹底した教育を受けていたようである。周囲を書架で囲まれた三階での仕事は時に猛然と片付くかと思えば時に遅々として進まぬ事もあったが、最終期限が決められているだけに焦燥感を持つこともあったが、疲れたなあと思う頃には茶菓の接待を受ける楽しみもあった。午前中から出かけた時等は、今日はシチューを作りましたから、今日はカレーライス、今日は五目ご飯がとお昼食のご馳走になることもしばしばであった。時には廊下にコツコツと靴音がしたかと思うとノックの音と共に長身のふくよかなローク先生(カナダの宣教師)がわざわざ来られ、まろやかなやさしいお声で「ティータイムですよ。さあどうぞ」と促されるままに導かれたところは、青楓寮から宣教師館へと続く廊下の一隅にあるティーコーナーである。寮の中庭の植込みが見下ろされ洋館の外壁に絡みついた緑や赤茶色の蔦、細かい花をつけた季節季節の木々、花々が午後の日を受け美しい一幅の絵のようであった。いつも必ず手作りのクッキーかケーキにミルクティかレモンティが添えられ甘いシナモンの香りやエッセンスの香りに酔うことしばしばであった。飽食時代の今日とは違った意味での手作りクッキーやケーキは決して店頭で見るとはまず皆無であった。当時のおやつは、焼いもとか、蒸しパンであった。これもあれば上々。とにかく美味しいお茶とお菓子に出会ったのは戦後初めてのことであるが、味そのものが美味しいのは確かであるがそれを造られた方々の温かい心遣いが美味しさをいやが上にも増していた。人の労をいかにねぎらうか、いかに報いるか、真心の深さを覚えると共に心のこもったねぎらいというものが人をどんなに勇気づけるもの

か、そのマナーを教えられた。

本格的な秋を迎えた頃、私の青楓寮通いもティタイムもカレーライスもすべて終り、中高に専念し始めた或る日、短大設立の認可が下りた。長野院長とローク先生とから「おかげ様で認可されました。ありがとうございました。」のご挨拶に「よろしゅうございました。おめでとうございます。」と申し上げるのがやっと。在校生はじめその父兄達の面影が重なり感涙のみ。この時も人の労をねぎらう一言がいかに人を自信づけるものか、教えられたことである。

昭和24年に始めて実施された野尻キャンプ（YMCA野尻学荘のキャビンを拝借し、YMCAのリーダーのご指導の許に行われた）でもどれ程多くのことを教えられたことか。当時のキャンパーで、昨夏「化石の会」（仮称）と名付けて当時を回想しつつキャンプを行なった。参加者全員が野尻シツクとか、野尻狂とかと称し野尻キャンプと切り離しては自己の存在はないと語り合うのであった。キャンプに関しては別に譲る。

過ぐる四十数年を懐古（ほんの一部であるが）し生活を共にさせていただいた諸先輩の先生方、この間生徒であられたすべての方々を思い浮かべ感謝しつつ冗漫な筆をおくことにするが、何とも言いつくせぬ心残りの多いことである。

史料室日誌抄 1991年度

- 4月26日 昨年度より継続の小学部印刷物の主題別作成。欠号を史料室委員に送付。
- 6月7日 各部署からの資料、寄贈図書整理。白百合女子大学生武藤恵子氏「村岡花子」について調べに来室。
- 6月14日 「東洋英和女学院礼拝堂」の建築に関する資料、記事のファイル作成。
- 6月21日 歴代校長、院長に関する資料を各人毎に纏める作業をはじめ。

- 6月28日 大阪の中野氏から大正13年頃在職の阿部静枝氏の歌集「秋草」の在庫の有無問合せあり。
 - 9月6日 青山学院大学キリスト教文化研究センターより「学校名称変更」の調査あり。既存の出版物では第二次世界大戦前後の時代が不明確な箇所あり。法人事務局企画室長吉田昭氏の協力を得る。
 - 10月18日 武蔵野美術大学院生松波朋子氏「ヴォーリス関係」について調べに来室。日加協会から依頼「過去に於ける在日カナダ人調査への御協力をお願い一開国前より世界第二次大戦終結後の1950年頃迄一」所蔵資料で不明確の点は法人事務局長谷川明子氏の協力を得る。
 - 10月25日 関東学院大学助教授小椋山ルイ氏「カナダの宣教師」に関して調べに来室。青山学院高等部清水正氏来室、本学院「百年史」の宣教師記載事項と他の記録、資料との相違点を示された、調査。
 - 10月30日 麻布学園山田直匡氏、小谷真男氏「東洋英和学校当時の写真」を調べに来室。
 - 12月6日 瀬川和雄氏より「Miss I. S. Blackmore について書かれたもの」の依頼あり。
 - 12月13日 Miss I. S. Blackmore に関する書目とファイル作成
 - 12月20日 Miss M. J. Cartmell に関する書目とファイル作成。
 - 1月17日 東京神学大学生田中かおる氏「Miss M. J. Cartmell」について調べに来室。
 - 1月21日 Mrs. T. A. Large の書目とファイル作成。（芝原 翠）
- あとがき 戦後の混乱期中高部で教鞭をとられた先生方に当時の思い出をお願いしてから三年、やっと第一回をお送りします。さまざまな角度から当時の記録を残してゆければと考えて居ります。
- （中・高部 斎藤浩二 谷川祐子 朽木久子）